

山村でグリーンとデジタルの融合を

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

2023年12月14日に「中山間地域フォーラム」の第1回研究会 Web 会議に参加して、そこに出演した2人の農業実践者の方々からお話を伺いました。

まず1人目の方、豊増洋右さん（株式会社 ONE DROP FARM 代表）は、他産業から転職して、千葉県の中山間地域において耕作放棄地を利用して、蜜源作物を栽培しておられます。クローバーなどの蜜源作物によって養蜂を行い、そこからはちみつを採取します。そのはちみつで加工品を作って販売をされているわけです。

蜜源作物を植え続けていますと、耕作放棄地だったところの土壌が肥沃になっていきます。そこで野菜をすることもできるようになります。このため野菜と一緒に作ってこれも販売できるようになりました。今では豊増さんは、各種の農作物、はちみつ、はちみつ加工品、野菜、その他の加工品などを販売されています。これら商品の販路は様々あるのですが、その土地にある中山間地域の直売所で実に6割を売り上げているとのことでした。

かつては中山間地の耕作放棄地だったところに、たくさんの人々がやってきて、直売所で産品を購入していくというのは、素晴らしいことではないでしょうか。

その手法としては、豊増さんは、SNSなどで盛んにこの地の景観など情報を発信をして、人々の関心を集め、関係人口を増やします。蜜源の花畑一面に花が咲いて、大変美しい光景になるので、人々は喜んでこの場にやってきます。そして直売所で物を買っていくのです。訪問客にとっては、ちょっとした観光になるというわけです。

もう1人の方、小葉松真里さんは、「フリーランス農家」と自称しておられる方で、こちらも他産業から転職された方です。北海道から沖縄まで全国各地の農業者の農場を回って、農作業や地域との交流を行って暮らしている女性の方でした。農業には播種、収穫などの時期に特に人手が必要になるという季節性がありますが、日本列島は南北に長いので、その繁忙期が地域によって異なります。

そのために、身軽に全国各地を動けるといえるのであれば、時期を変えながら「援農」をするというのは、大変合理的です。これが小葉松さんが、「フリーランス農家」と言われている理由です。自分で行ってみたい地域で援農し、気に入れば毎年、何度でも訪れることができるわけです。

小葉松さんはこのような形で援農を行うだけではなく、ライターでもあります。これがフリーランスと言われることの真骨頂でしょう。それは、ユーチューブなどで各地の景観や農業の様子などを文章にするとともに、動画・写真も撮影して発信するのです。地域の人々と交流しながら関係人口を増やしていくという活動の発信拠点として、一役買っているということになります。

小葉松さんは、もともとは有機農業をやりたくて就農を考えたそうなのです。しかし

初期投資が大きいなどの問題から就農は断念して、このようなフリーランス農家という道を選択したと言われていました。

この2つの事例に共通していることは、2人ともスーパーマンのような非常に独創的なアイデア、オリジナリティとパワーを持った人だということです。誰にでも簡単に真似ができるというものではないでしょう。

しかし同時に、2人に共通して特徴的なことは、1つは、有機農業、環境保全といった生態系に対する関心が深いことです。また2つめに、デジタルツールを利用して、積極的に発信しておられることです。いわゆるグリーンとデジタルという側面ですが、今の若い世代には共通する思想傾向なのではないでしょうか。「Z世代」などと言われるように、世界的にこういった傾向があるものと思います。

そして私が思うのは、山村振興という観点からも、こういった若い人たちの傾向が大変重要ではないかということです。

以前私は、全国山村振興連盟の出張で、山深い道路の行き止まりにある集落を訪問したことがあります。そのとき、その奥まった地で古民家を改修して民宿を営んでいる人たちに会いました。「観光客がここまで来てくれるものだろうか」と、一瞬心配してしまっただけですが、そうではなかったのです。

その方たちによると、「ここに来てくれるのは、観光客ではないのです。私は、SNS上で数百人の知合いがいます。その人たちと日頃から会話するなど交流しているので、その人たちが泊まりに来てくれるんです。友達としてきてくれるんですよ。」とのことでした。

SNSでビジネスとして発信する人も立派ですが、それに対して日常的に関心を持って見つめてくれている多数の若い人たちの層がいるということは、もっと大切なことではないかと思いました。

若い人たちはSNSなどで情報を見ていて、「山村だから不便だ」というのではなく、むしろ「不便なところだから何か面白そうではないか」といった関心を嗅ぎ取るのだと思います。

山村には確かに条件不利な側面が多々あります。しかし、グリーン、つまり森林が中心となって多様な動植物の生態系を形成しています。これについての若者の関心は高いものがあります。また、森林が二酸化炭素を吸収するだけでなく、そこを基点として、今私たちが呼吸している酸素を生み出し、水や木材やキノコ・山菜や、ひいては農産物を育てる土壌・栄養などを供給しています。こういった点で、山村はあたり一面緑だらけなので、グリーンという特徴ではどこにも負けない資源を豊富に有しています。

またそれと同時に、若い世代はSNSを日常的に活用して、面白いこと、面白いところを探し求めているわけです。都市の若者にとっては、山村は別天地です。そうした意味で、山村の普通の生活、普通の集落には、今の若い世代にアピールする面白いことが豊富に存在していると言っても良いのではないのでしょうか。

こういった条件不利ということを手にとり、長所としてアピールしていくことも大切ではないかと考えました。